

# 他者の性格の評価が、その人を好きか嫌いかでどのように変化するか

○梶原直樹 (日本女子大学)

梶原和子 # (下野市立古山小学校)

キーワード：対人魅力、性格、対人好悪

## 目 的

他者の魅力を評価するときに、態度や性格の類似度が高まるほど、魅力も高くなることが示されている (Byrne & Nelson, 1965)。そこで、梶原・梶原 (2012) は、その逆に、自分の性格が、好きな人、嫌いな人とどのように類似するのかを調べた。その際、主要 5 因子を性格の評価点にして、調査対象者自身が、自分と好きな人、嫌いな人の三者すべての性格を 5 段階で評価した。その結果、評価が、好き、自分、嫌い、の順になった。だが、ここには、評価対象者に対する好悪が影響したと考えられた。そこで、実在の好きともっとも望ましい好き、実在の嫌いともっとも望ましくない嫌いを比較することで、実際に好きな人と嫌いな人の性格を、どのように評価しているのかを調べた。

## 方 法

**調査対象者** 女性 118 名と男性 83 名の 201 名の通信制大学生を調査の対象とした。平均年齢は、48.2 歳 (SD=10.9 歳) であった。

**調査内容** 村上・村上 (1999) による主要 5 因子性格検査における、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性を評価項目とした。外向性は、内向的と外向的、協調性は、冷たいと暖かい、勤勉性は、怠惰と勤勉、情緒安定性は、神経質と気楽、知性は、浅はかと思慮深い、を両端として 5 段階に区切った。

**手続き** はじめに主要 5 因子の説明をしたあと、その 5 項目について、対象者に、自分の友人として、想定されるもっとも好きなタイプ (好・想) と嫌いなタイプ (嫌・想) を、5 段階で評価させた。その、約 24 時間後に、対象者自身 (自分) と、実際にもっとも好きな人 (好・実) と嫌いな人 (嫌・実) の三者を、同じ項目について 5 段階で評価させた。評価の順序は、自分、好き、嫌い、による 6 通りの順列のいずれかとした。

## 結 果

各因子の評価スコアを、左から右へ 1 点から 5 点とし、評価対象ごとに、5 因子の 5 段階評価のスコアを合計し、その平均値を求めた (Table 1)。これらの値について、因子ごとに、1 要因 5 水準の対象者内計画の分散分析を行った。その結果、評価対象の

効果は 5 因子のすべてで有意であった。そこで、LSD 法による多重比較を行った結果、好・実と好・想は、外向性で、好・実>好・想、協調性と勤勉性で、好・実=好・想、情緒安定と知性で、好・実<好・想、となった。嫌・実と嫌・想は、すべて、嫌・実>嫌・想、となった。また、自分と好・実は、すべてで、自分<好・実、となり、自分と嫌・実は、外向性以外では、自分>嫌・実、であったが、外向性のみ、自分<嫌・実、となった。

Table 1. 各評価対象の因子ごとのスコアの平均値

因子	評価対象				
	自分	好・実	好・想	嫌・実	嫌・想
外向性	3.2	3.8	3.6	3.5	2.7
協調性	3.6	4.4	4.4	2.0	1.3
勤勉性	3.7	4.1	4.2	2.7	1.5
情緒安定性	3.0	3.9	4.3	2.1	1.5
知性	3.7	4.1	4.4	2.1	1.6

## 考 察

自分が実際に好きあるいは嫌いな人は、想定される最良と最悪のものではないという結果になった。だが、好きについては、特に、外向性、協調性、勤勉性において、理想像ともいえるような評価がみられた。おそらく、良好な対人関係のもとでは、相手の、外向性、協調性、勤勉性を、より高く評価する傾向があらわれるのかもしれない。

一方、嫌いについては、外向性以外は、スコアがすべて自分よりも低くなった。外向性の高さも、他の低さとの兼ね合いで、ここでは、ネガティブにはたらいたようである。つまり、好きあるいは嫌いであることが、結果的に、好きと自分 vs. 嫌い、ともいえるような関係を生じさせたと考えられる。

## 引用文献

- Byrne, D., & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663.
- 梶原直樹・梶原和子 (2012). 対人魅力と性格の類似性との関係 日本心理学会第 76 回大会発表論文集, 2AMB11.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1999). 性格は 5 次元だった 培風館